

グアテマラと日本をつなぐ 特別寄稿

ハリケーン・スタンのただ中から

青年海外協力隊 著作絵美

日本では7月から9月にかけて、多くの台風がきます。しかし、北海道にいたっては、大半が勢いを弱めて到着するので、台風の本当の恐ろしさをあまり知りません。昨年、台風の影響で弟が大怪我をしましたが、幸いにも回復しました。

10月、グアテマラにハリケーンがやってきました。今回のハリケーンは特にグアテマラの西部やメキシコ地方を襲い、多くの被害を出しています。私の任地はグアテマラの西部（サンマルコス県）にあり、メキシコ国境に近いところにあります。ですので、今回のハリケーンの被害を、目の当たりにしました。

10月3日火曜日、普段は夕方から降り始める雨が、この日は朝から降り続けていました。その日は私はある田舎の学校で折り紙の授業をするということで、朝6時半にはバスに乗り、家を出発していました。道中もひどい雨。学校に着いても風と雨はやむことなく、学校に来たのは全校児童の約半分。雨の中でも一生懸命学校に来た生徒たちに感謝し、折り紙の授業を行いました。折り紙の方はなかなか生徒に反応が良く、来年からもこの学校で何らかの活動をしたいと思えるほどでした。

しかし、帰り、午後1時（グアテマラの小学校は午前中だけです）、いつも通るはずのバスが、1時間待っても通りません。雨と風の影響で、バスがストップしている状態。そのような中、学校の先生方のミニバスが到着したので、ぎゅうぎゅうづめの中、乗り込みました。

道は泥だらけ。途中、車が泥に埋まり、男の先生方が雨の中、その泥を取り除く作業をしました。いつもより時間がかかって、ようやく国道にたどり着き、全員がやっと家に帰れると思った瞬間、突然の渋滞。前の方の様子を見に行った先生の話によると、がけくずれ、木の倒壊、現在トラクターでそれらを取り除いているが、全てを取り除くには3時間はかかるだろうということ。時刻は午後4時。女の先生2人と私はバスを降り、歩いて帰ることを決意しました。途中、泥の上を歩いていた時、靴が泥にとられ、泥の中に埋まってしまいました。必死で靴を探し見つけあてましたが、ズボンも靴も手も泥だらけ。傘はさしていましたが、もはや意味をなしておらず、ずぶぬれのまま、歩き続けました。しかし、ここは日本人根性（？）。貴重な体験だと思い、しっかり写真だけは撮りました（^^；）

1枚目の写真は、その道の途中で撮った写真です。1時間ほど歩いたところ、私の任地から違う地方へ行こうとしていたバスがあきらめて引き返してきたところで、そのバスに乗り込み、無事に家に着くことができました。すぐにシャワーを浴び、ベットの中に入りましたが、案の定風邪をひきました・・・。

翌日、このハリケーンがものすごい被害を出していることを実感しました。まず、水と電気がない。電話線も切れてしまった。携帯すら電波が届かない状態。JICAからの連絡では、3日間任地からは決して動いてはいけないという情報が入り、この雨と風の影響を目の当たりにします。家では電気がないのでテレビを見ることができなかったのですが、ラジオからの情報では、様々なところでがけ崩れや木の倒壊、道の封鎖、家屋の破壊、洪水等が起きていることを知りました。

そしてその翌日、木曜日、電気が普及したところで、テレビから恐ろしい映像が飛び込みました。大人の胸の下まで届く水の量、多くの家屋の倒壊、知り合いの家族が全員がけ崩れで流され、未だに遺体が確認されていないことや、市役所の車からの呼びかけ「非難している人たちに少しでも食料や服をわけてください。10時間以上雨にうたれ続けた子どもがいます。薬を分けてください。感染症に気をつけてください。」多くの情報が届く度に、被害の深刻さは増します。ある村は消えてしまったとか、メキシコから歩いて非難してきている人がいるなど、想像を絶する情報ばかりでした。

いてもたってもいられなくなり、雨が少しおさまった頃、隣の町にある体育館が避難所になってると聞き、近所の知り合いとかけつけました。そこには、列を作って服の供給を待っている人々、タンクトップ姿で泣いている子ども、親の行方がわからずに兄弟だけでたどり着いたという幼い子どもたち。配属先である教育事務所と様々な団体が協力し、その避難所で食べ物を作り配給しました。しかし、数が足りません。どんどん増える人の数。遠くから何時間もかけて歩いて非難してきたという人、ずぶぬれの服のままあたたかい飲み物をくださいと言ってくる人、とにかく祈っている人。自分には何ができるか考えましたが、結局何もつかばず、子どもたちのたわいない話を聞いて、胸を痛めて家に帰ってきました。家の人も違う避難所に服を供給してきたといい、そのついでに被害地を少し見に行ったのですが、3階建ての家がペシヤンコになっていたと言っていました。

私の地域には金が埋められていると言われていています。その発掘のため、多くの地盤が削られているところでした。更に、途上国ということもあり、家屋はしっかりとした作りではなく、地盤もしっかりしていないところに、所狭しと家が建てられています。大きな石がゴロゴロしているところにも家があり、人が生活しています。このような状態の中、激しい豪雨にみまわれると、すぐに破壊されてしまいます。そして、常に被害を受けるのは貧困層です。これが、途上国の現実なんだと実感しました。

幸いにも、私には何の被害もありません。いざとなったら、JICA が援助に来るという保障もあります。そのような中で生きている私と、この国で実際に必死で生きている人たち。考えれば考えるほど、自分の小ささや力のなさを感じました。

しかし、その中でも、ホームステイ先の子どもは、食べ物を残す、気に入らない食べ物があれば違うものを頼む、ニュースよりも漫画を見ている、家の中で退屈だと叫んでいる、一方で、涙を浮かべながら笑顔で語りかけてくる避難所の子どもたち、食べ物を兄弟でわけあっている子どもたち、このような格差もまた途上国の問題なんだと感じました。

今後、この体験が私の活動にどのように関わってくるのか。自分でも模索している状態ですが、自分たちが本来やらなければならない協力隊としての活動についてもう一度振り返り、決してあの子どもたちの涙を浮かべた笑顔が無駄にしたいと思いません。少し暗い話になってしまいましたが、今月のメールはこのへんで。来月は楽しい話題が送れるといいなと思っています。

(本人の承諾を得て、メールから転載させて頂きました。)